

たので、びっくりしていました。

復員してから元のステンレス工場へ戻りましたが、職場が変わって庄延作業という暑い仕事だったので一年ばかりで辞め、北海道炭鉱汽船のカムイ炭坑で一年八カ月働きましたが、炭坑の国家管理で月給が安くなったのとインキが凍る寒さに閉口して新潟に帰り、河川改修工事につきました。張付役に元少佐がおり「部隊長」と呼ばれていました。さすがに恰幅の良い人でした。

当時、地元の企業の信越化学でも戦後の混乱期だけに本工の採用は無く、季節工しか採用しないので困っていましたところ、ある人の紹介で名古屋の日本電工の下請け工場に勤めることになったのです。昭和二十九年四月でした。

嫁さんは名古屋の人をもらいましたが平成四年にガンで亡くして目下、独身の息子と二人暮らしです。私は身体だけは丈夫で、朝四時半起床、一時間歩いていきます。

新兵当時ビンは喰ったけれども、私はすぐ鼻血が

出るたちだったので、古年兵が驚いて叩くのを止めたので他の者にくらべると叩かれるのは少なかったと思います。

軍隊日誌

武漢攻略戦前後

岐阜県 岩田義雄

私は大正七年一月七日、現高山市で生まれ、昭和十二年に現役志願兵として徴兵検査を受け、十三年一月十日、富山歩兵第三十五連隊留守隊に入営、一期検閲後の四月、中支派遣の第九師団の本隊に追及のため蘇州へ行き、警備と二期教育を受けました。

その当時、南京付近は完全占領し、いよいよ武漢（漢口、武昌）攻略戦の準備中でした。八月八日午前十時蘇州の兵営出発、午後七時、鎮江駅下車。十三日午後三時揚子江岸より乗船溯江。十八日午後二時、敵弾の飛ぶ中を九江に上陸、まさに敵前上陸でありまし

た。

二十四日午後七時、瑞昌を攻略。二十七日午前十時、瑞昌南方から攻撃前進し、九月三日、馬廻嶺に進出しました。鎮華山警備。瑞昌に向かい、九月十二日午前四時半瑞昌発、十月四日午後十時、東山占領。

六日、箕心において大激戦。午後九時夜襲を受け、山頂で敵味方の白兵戦となり両者ともに多数の戦死者を出し、この日一日で、我が中隊から十六人の戦死傷者を出しました。ようやく敵との攻防戦に勝ち、十日の晩に東山占領警備につきました。

続いて漢口攻略戦に移るのですが、部隊は十月二十六日午後五時十五分、粵漢線の賀勝鎮を占領し、咸寧を通過、十一月三日、陸水渡河、蒲折より七日、新店鎮攻略入城。十日より羊樓司の警備。十二月六日、同地発、第九師団は咸寧―岳州間に兵力を集結し、付近の残敵を掃討の命を受け、部隊は付近の警備に任じていました。

昭和十四年一月一日、八角泉警備から日誌のうち主たるものを書き抜いてみます。

昭和十四年

一月一日 日曜日 曇

朝食に餅五片ずつもらった。小さな餅五片ではあるが、家で大きな餅十片より有り難くおいしい。午前九時四分、遙拝式で整列後連隊本部にて軍旗拝賀、後、中隊前にて皇居遙拝訓示、万歳三唱乾杯をして解散。午後は休養。加給品にようかん二本とリングゴ四分の一、思いもよらぬこんな中文の真ん中にて皇紀二千五百九十八年を迎えようとは。今年は寅年だ。一瀉千里猛虎の勢いで四百余州に日の丸を高々と揚げるのだ。

一月四日 水曜日 曇

午前中炊事の使役で、木割りで一汗流した。午後は使役なし。川向こうの部落まで薪の徴発に行ってきた。晩はチラチラと雪が降り出した。降っても無理ない一月だもの。

一月五日 木曜日 曇

一同正月気分でしたら突然出勤命令で午後一時出発。自動車で大社坪まで行って宿営、向こう五日間の予定と聞いてビックリ。

一月六日 金曜日 曇・雪

午前六時起床。八時出発でドンドンと谷川に沿って山奥へ。八中隊の向かう所敵なしで高い山を越えて羊樓司へ一里半という所で宿営。山の中で薬もなく、寒い、寒い。今日は一日中外套を着て歩いた。

一月七日 土曜日 晴

討伐第二日目。午前八時出発。大隊の後を追及して山の中をあっちこっちと約四里。季家に到着、後軽装で高い高い山へ登らされて汗ダクダク、帰りは日が暮れて真っ暗になった。宿営に入っても暗くて薪一つ分からず部屋がないので広場に寝た。山道は雪が少しぐらい。滑るやら、冷たいやら、情けなくなった。

一月八日 日曜日 晴

討伐第三日目。午前八時出発。今日は討伐しながら帰途についた。この前に中隊が討伐に行った所へ出て来た。足をくじいて引きずりながら歩いた。

一月九日 月曜日 曇

今日は優しい白ジ橋へ帰った。自動車にて崇陽まで来て、後は行軍だった。僕は足が痛いので白ジ橋まで

自動車で来た。全部午前中に到着。午後は休養。私物が届いた。今日初めて慰問袋一つもらった。謎のようなこの袋を開く心の楽しさ。上野 恒治様より。

一月十日 火曜日 晴

朝、足が痛いので診察に行ったら捻挫で、練兵休になった。足を包帯してもらおうと、なお痛いような気がする。去年の今日の入営を思い出して、懐かしい。

一月十二日 木曜日 曇

朝八時、中隊は補充兵と練兵休を残して討伐に出を行った。中隊が淋しい。気紛れに書簡一、三本を書く。

二月十日 金曜日 雨

討伐六時起床。七時出発。意地悪く朝から一日中雨降りだった。道はドロドロでよくすべる。上からと中からの汗とで、体中ベタベタ。南方の高嘉嶺の部落まで。巻脚絆はドロドロで、大洗濯をした。

二月十五日 水曜日 雨

午前中何もしない。午後二時より討伐に出動。太子方面。雨と汗でベタベタ。敵没有異状なし。

二月十七日 金曜日 曇

衛兵当番だったが、取りやめで八角泉分屯を命ぜられ午前中諸準備。午後一時、出発。移動やら何やらで大忙し。早速設営。どうにか夕方までに入れるようになった。晩八時より、衛兵につけられた。真っ暗で抵抗線もなく、心細い。

二月十八日 土曜日 雨

衛兵下番休養。午後軽機関銃の分解をしていたら敵襲バリバリ。大忙しで組み立て、出動。そのころはどこへ行ったやら敵影なし。後、鉄條網張りの使役に。

三月一日 水曜日

衛兵上番、裏門三番立。午後零時半ごろまたも高嘉嶺中腹に敵があらわれた。これを発見して、一発発射したら、バタバタと倒れた。主力は直ちに出て、小銃軽機敵弾筒で応戦して、二十分交戦し撃退する。久しぶりのよい天気で暖かかったが、晩は天候一変して、稲光りや雷までも出動し、賑やかだった。

三月十二日 日曜日 曇

午前中、宣撫工作で約三キロ程、北の部落を回ってきた。途中の部落に桜があってみんな一枝ずつ折って

きた。午後は休養。何かあればいやだし、何もなくていいやだし……。

三月二十五日 土曜日 曇

朝七時起床。検閲のため、中隊へ帰る補充兵と一緒に診察に出かけたら、敵に襲撃され、直ちに応戦。三方より包囲されて交戦五時間。大隊の救援を得てほつとした。一時は迫撃砲に見舞われ電話不通。援軍来ず、心細かった。夕方負傷兵と一緒に中隊にきて、一の五に泊まった。

四月十二日 水曜日 晴

いよいよ、頼んで明日退院を許してもらった。嫌な病院生活は今日一日だ。森島班長、谷川氏は後送になった。午後、床屋へ行って久しぶりにすっきりして気持ちが良い。

四月十三日 木曜日

今日はいよいよ、中隊に帰れると思うと、朝から嬉しい。午後、準備を整えて一時半頃に弾薬受領のトラックに乗って、三時半ごろ中隊に帰った。中隊は大討伐に出て勤務員のみで淋しい。第一小隊第五分隊に厄介

になる。晩、久しぶりで谷口君のところへ、色々と話多し。お便り十通程受けた。

四月二十八日 金曜日 晴

遊撃隊約二千、李家方面に出たので、朝から大討伐。砲声、銃声しきり。分屯隊は、高家領頂上を占領して待機。

四月二十九日 土曜日 曇雨

天長節の遙拜式を行い、遙かに皇室の繁栄を祈願す。横山付近に大遊撃隊が出て、非常警式について巻脚絆を履いて寝た。

四月三十日 日曜日 晴

午前六時四十分起床。敵襲。直ちに配備に就き応戦。霧深く、十メートル先しか見えぬぐらい。それを利用して、雨あられと噴射し手榴弾を投げる所まで接近して来た。霧が晴れたら迫撃砲を集中されて、兵舎はほとんど穴だらけで負傷者続出。十時小隊長殿負傷、十一時戦死。敵は一日中、山上から猛射。食事もできず、夕方、またも迫撃砲の集中。晩も一晚中夜襲夜襲で、絶え間なし。とうとう一睡もせず。

五月一日 月曜日 晴

今日も朝から襲撃、襲撃で既に弾薬もわずかとなり、応援隊もこず、またまた迫撃砲に見舞われて、依然敵は退却せず。午後、少し射撃が止んだので、休もうと思っても、なんだか眠いようで、眠れず。腹ペコで食べ物もなく、カンメンボウをかんでいた。晩、またも夜襲、夜襲で銃声絶えず。一部の応援隊が届いて、勇気百倍弾薬の補充も少しいった。

小隊長、見習士官、宮崎立、十一時戦死。富山県出身。

五月二日 火曜日 晴

午前四時、突撃ラッパを合図に襲撃してきた。月明かりをすかして前方二十メートルまで接近して、手榴弾を投げる。味方の弾薬は少なく、最後の銃剣を信頼して抵抗。夜明けごろには鉄条網の中まで入ってきた。既に三日不眠、不休、不食で、もう死を覚悟した。命を捨ててから、もう無我夢中で、頑張れと励まし合って悲壮なる奮戦をした。午後になって敵は山上まで大多数の死体を残して退却した。午後四時半ごろに飛行

機の援護爆撃があつてひと安心。全く命のあつたのが

不思議で、目はくぼみ、体中が骨無しのように疲れた。

夕方になつても応援部隊は到着せず、もう一晚頑張れとの命令で、寝ずの番交戦。敵は朝から突撃ラッパを吹いて歓声を上げては、接近してくる。手榴弾を一斉に投げに、十メートル前ごろまでくるので撃ちまくり、一人殺してはニッコリ笑う。隣の部落は、手榴弾でほとんど壊れ、向かいの部落は焼かれ、全く悔しくて、悔しくて。兵舎の屋根は穴だらけで入る所もなし。晩は、山上よりの射撃のみだったので良かった。

五月三日 水曜日 晴

夜が明けたら何とかなるだろうと思つて、夜明けを待った。朝になつて、山砲の援護射撃があつて、ピューピューと飛んで来たら敵も退却を始め、応援隊も到着してひと安心。戦場掃除に出たら、敵の死体や接近してきた跡に驚いた。

五月四日 木曜日 晴

起床！ 起床！ と言つても、なかなか起きにくい。足がだるくてだるくて。午後三時より使役。鉄条網の

修理と増設。汗だくになる。

戦場掃除の結果敵死体一六三、手榴弾一八五、小銃弾葉七二〇〇、小銃一一、円ビ・十字鏃二〇、その他多々有。

五月五日 金曜日 晴

衛兵上番。変な情報も入つて居る事。この間の経験もあつて、思わず緊張する。この敵壕を照らす月も……見る月も変わりなければど。

五月六日 土曜日 晴

衛兵下番、休養。午睡の後が尻の毛を抜かれたようにだるい。午後使役。部落の東側に鉄条網を張ったり、掩蓋を造った。中隊より連絡をかねて、使役の手伝いが来てくれた。

五月七日 日曜日 晴

いよいよ、移動命令が来て、私物梱包やら、整頓やら。午後、中隊より被服がきて、冬物一斉取り替えになった。新しい靴に、新しい巻脚絆、新型の夏衣袴に夏襦袢テンホウテンホウ。

晩、情報が入つて非常配備。毎晩巻脚絆をはいて銃

に弾を装填して寝るような所は一日も早く移動させてくれ。

五月八日 月曜日 晴

今に起床がかかるか、かかるかと思っていたが何も異状なく夜が明けた。午前鉄条網張り使役。迫撃砲の穴だらけで、夜も月光が入って昼と同じようだったが、今日は修理された。晩、増加衛兵についた。

五月九日 火曜日 晴

今日は三カ月住み慣れた懐かしい八角泉を後に交代部隊に申し送って、昼食後、白兎橋に引き上げた。

交通不便で水悪く、敵の多い八角泉だが、住めば都で名残惜しい。午後、出発。中隊にて一泊。使役二三。晩は一パイ。

五月十二日 金曜日

午前八時出発。羊棲洞駅にて昼食、大休止。三時間鉄路上を約三里共板橋より一の部落にて宿営。足を引きずって泣き出しそうな顔。十カ月目で動く汽車というものを見た。「富山、富山」という駅手の声が聞きたい。

五月十二日 土曜日 晴

午前七時出発。約二キロを行って、十字路部落にて背囊を下ろして討伐に出動。僕は装具監視で残った。

二時半ごろ設営のため、臨海駅一里の所へ行行って設営。今日は一日休養のようなものだったので、疲れも少しよくなった。

五月十四日 日曜日 晴

午前八時半出発。鉄路に沿って路口補まで十二キロ。今日は行程も少なく、苦力を雇ったので楽だった。行軍中もそよ風が吹いていて、心地よい行軍日和だった。

五月十五日 月曜日 晴

命令急変で大隊主力は回れ右をして九宿山方面の大討伐に行ったので、中隊で一個小隊が目的地の臨湘に向かつて先行した。路口補より鉄路と離れて、低い山の凹地を出るとはや湖水が見え出した。田舎者が大都会へ飛び出したように広々とした景色が珍しい。

五月十七日 水曜日 曇雨

朝早く三六の部隊が出発して行った。今まで一個中隊、大隊本部、機関銃、大隊砲、その他たくさんいた

町をたった一個小隊で引き受けたのだ。

午後より警戒範囲縮小で、第一陣地は引き上げになり、南門に掩蓋造りの使役をした。晩、元大隊本部の位置に移った。

五月十八日 木曜日 曇

午前九時、部隊衛兵上番。部隊が少なくなったので、土民が不安がって、避難する者もある様子。情報も二、三人だったが、われ等の威力に恐れて何等異状なし。

六月十三日 火曜日

午前八時より大隊の慰霊祭が行われた。上海戦以来五百十一人、聖戦の華と散った戦友の霊に別れを告げて中支を去るのだ。午後、連絡と使役に岳州へ行った。俸給をもらったので、弾んでちょっと朗らかに遊んできた。連絡も面白いけれど、日中焼土の上を歩くのが辛かった。水が悪く、どこへ行っても臭い溜め水しかないのです、三度三度の食事が嫌になる。

六月十七日 土曜日 雨

朝から別れを惜しむ雨が降って止まない。十一時、出発。乗船場に向かう。ここにて約二時間休み。一時

四十分、最後の足跡を残して内地行きの汽船に乗る。

無事でこの船に乗る日がいつであらうかと思っていたが、思えば全く感慨無量だ。四時、出帆。三キロ下って停泊。朝からの頭痛がやまず、船内に入ってから熱が出て全く苦しかった。昼食も夕食も絶食。

内地出発の日も雨だったが、中支出発の日も雨だ。中支よ、さらば。

六月十八日 日曜日 曇

午前六時半、出帆。揚子江に出て、快スピードで下へ下へと走る。今日は葉が効いたか、気分が少しよい。午後の四時半、漢口に停泊。漢口へ漢口へ。通りすぎて岳陽まで行ったが、さすがは漢口だ。立派な洋館がずらり並んで各国の船がいて、こんなに良い所をみすみす取られて敵国の船を勝手に通している。なんと情けない支那だろう。

六月二十日 火曜日 雨

補充の若い兵隊を満載した船が三隻も上流へ上が行った。互いに手や旗を振って「万歳！ 万歳！ 後を頼みます」。

去年、この辺を通った時は兩岸の山々から機関銃や迫撃砲を見舞われたが、今では小輩が笠を回して歓迎している。六時ごろ、蕪湖を過ぎて約二時間程停止。

六月二十一日 水曜日 晴

船は一路東へ進む。十時ごろ、南京に停泊。ここで船は諸物品の補給のため、停止。上流より幾隻も大きな船が来て、南京江上は大賑わい。夜の南京の眺めは、実にきれいだ。明るい電灯が江水に長く影を引き、上空に幾條もの照明燈が交差して照らしている。

六月二十三日 金曜日 晴

午前六時、船は南京を出航。だんだん広い、山一つない大平野に出た。川幅も二里、三里、五里と広くなってくる。海か川か分からない。

午後四時、衛兵下番。船は王山ウースン三十キロ手前沖に停泊。いよいよ明日は海へ出る。

六月二十四日 土曜日

午前十時ごろより海に入り、だんだん水の色も黄色から青に変わって、島一つ見えぬ大洋の真ん中を内地へ内地へ。いよいよ船がゆれ出し、頭の中が何だか変

になって、気持ちが悪い。船は夜通し航海した。

六月二十五日 日曜日 曇雨

今日は、飯を食わぬ者が分隊に二、三人出だした。去年の今ごろは病院でいやな退屈な日を続けたが、今年は船の中でいやな生活をしている。もう二日余りの我慢だ。夕食から、約三十八度の熱が出て、三時間程苦しんだ。

六月二十六日 月曜日 曇

ああ、陸が見える見える。懐かしい日本だ。船は九州の西岸を通って、午前十時、関門海峡に入る。二時間程停泊して、糞便検査があった。兩岸の街々や船からは「万歳！ 万歳！」と日の丸を振って、歓迎してくれる。全く感極まって涙が出る。元気でこの感激の日があるとは、全く不思議でならない。

この感激を思うにつけ、亡くした戦友のことが想い出されて感慨無量だ。晩は、加給品のビールも上がった、一同朗らかに祝意を表す。

六月二十七日 火曜日 晴

真夜中午前一時半ごろに似島沖について、停止。検

疫を待つ船が十五、六隻も来ている。「おれどん丸」は、明日二十八日に決定して、一日滞在。

いよいよ明日は十四カ月ぶりの懐かしい母国の土が踏めると思えば、胸がおどる。

六月二十八日 水曜日

午前九時、下船。検疫所に行く。完備した設備によって機械のようにどんどんと検査をすまして行く。それだけにまた時間的に忙しい。所持品を出して薬品消毒と蒸気消毒に分け、被服も赤と白の袋に入れ、裸になって身体検査をして入浴し、休憩室でお茶と汁粉を出してもらい、今度は消毒済みの熱い衣服をもらって来て軍装をしても、暑いやら忙しいやら。

後、税関検査を受けて、昼食して帰船した。どこへ行っても若い娘のサービスで、はじめて日本へ帰ってきた嬉しさを感じた。午後二時、再び乗船。

六月二十九日 木曜日 晴

列車の都合上、今日一日船内にて待機。今日一日がとても長い。晩は、不寝番についた。立哨中、身投げ自殺者が出て、非常呼集がかかって大騒ぎした。

六月三十日 金曜日 晴

午前八時より、下船開始。午前九時から宇品に上陸し、感激の第一歩を踏む。休憩所にて午後八時まで大休止。荷物の使役に出て、休憩所付近にて一杯呑んで上機嫌に。とても早かった。

午後十時、宇品駅にて乗車。汽車は一路富山へと、われらの歓喜を乗せて……。

【解説】 武漢攻略戦前後（戦闘日誌）

漢口作戦実施決定への道程

昭和十二年七月七日、北支事変が発生し、局地解決に努力したが、戦線は逐次拡大、同年十二月十三日、首都南京を陥落させ中支方面の戦局は一段落を告げたように見えた。

昭和十二年十二月二十四日「支那事変対処要綱」を閣議決定した。大本営は事変発生以来、事変の早期解決を図るため、十月下旬から駐支独逸大使を仲介とする和平交渉を進めていたが、交渉は容易に進展しなかった。

參謀本部は「和平交渉に関する各方面の意向が甚だしく侵略で、日支国交の将来を誤る恐れあるので、この際御前會議を開催し、日支国交再建に関する根本方針を確立し、ややもすれば侵略的に傾こうとする国内情勢に対し予防方策を講じておく必要あり」との意向を熱心に表明し、昭和十三年一月十一日御前會議開催となり、「支那事變処理根本方針」が決定された。

しかし、和平工作の限度、一月十五日までには期待する中国側の回答が得られず、一月十五日、大本營政府連絡會議で「蔣政権否認」

「……帝國政府ハ爾後國民政府ヲ對手トセス、帝國ト真ニ提携スルニ足ル新興支那政権ノ成立發展ヲ期待シ是ト兩國國交ヲ調整シテ更生新支那ノ建設ニ協力セントス……」

との政府聲明が發表された。これにより和平工作は一時的に挫折したのである。このような情勢のもと參謀本部は、長期戰準備をしなければならなくなったのである。

國民政府は六月三日、國共合作（國民政府と共產黨

政府）を決議し、共產黨最高幹部を國民黨に復席させた。また、六月五日漢口で軍事會議を開き、漢口防衛の新作戰を發表した。

國民政府は六月九日、在漢口の各機關に対し重慶及び昆明等に移転を命ずるとともに、蔣介石は聲明を發表、漢口放棄を發令したが、共產黨の抗日意見が大勢を支配し、武漢死守論が採用され、日支の和平論消滅し、抗戰論が支配的となる。

大本營陸軍部内では、漢口作戰實施に關連して、漢口攻略と広東攻略を同時に実施するか、本年は広東作戰のみにとどめ、漢口作戰は明年以後實施の意見もあった。

しかし、對ソ戰が生じた場合の兵力運用の容易や船舶資材不足が見込まれ、漢口作戰を今秋實施、続いて広東作戰實施の方針が五月末決定された。

十三年七月末、陸軍主要地上兵團配置は次の如くであった。

内地 近衛師團、第十一師團

朝鮮 第十九師団

滿州 第一・第二・第四・第七・第八・第十二・

第二十三師団、獨立混成第一旅団、第一・第三

獨立守備隊、第四百師団（大本營直轄、待機）

台灣 台灣混成旅団（波田支隊欠）

北支 第五・第十四・第二十・第二十一・第二十

六・第百八・第百九・第百十・第百十四師団、

獨立混成第二・第五旅団、騎兵集團、

中支 第三・第六・第九・第十・第十三・第十五・

第十六・第十七・第十八・第二十一・第二十七・

第百一・第百六・第百十六師団、波田支隊

ソ連の極東兵力は昭和十二年末には二十個師団で、更に増強されつつあった。従つて對ソ戰備としては極めて危険な状態であつたが、中・南支に新作戦を計画することには簡単に踏み切れなかつたのであろう。

しかし、証言者岩田氏の所属する第九師団は、八月一日、第十一軍に配屬され、二十二日、同軍戦闘序列に編入された。

漢口作戰兵力部署と集中は、七月十四日正午「中支作命甲第一号、中支派遣軍命令」により發動した。その五及び七に第九師団任務が示されている。

八月二十二日、漢口攻略に関する、大本營陸軍部の命令を發した。

大陸命第百八十八号（八月二十二日）

一 中支派遣軍ハ海軍ト協同シテ漢口付近ノ要地ヲ攻略占拠スヘシ 此ノ間成ルヘク多クノ敵ヲ擊破スルニ努ムヘシ

漢口付近攻略後ノ占拠地ハ勉メテ之ヲ生縮スヘシ

二 北支方面軍ハ中支那派遣軍ノ作戰ニ策應シテ敵ヲ牽制スルニ努ムヘシ

三 細項ニ関シテハ參謀總長ヲシテ指示セシム

八月二十一日 呂集團作命第三十四号「五 第九師団ハ速ニ……」の命令に基づき、第九師団は丸山支隊（歩兵第六旅団長丸山政雄少將の指揮する歩兵第七・第三十五連隊を、八月二十一日九江を出發させ、主力

に続行した。丸山支隊は二十四日瑞昌付近に進出し、

波田支隊の左翼に連係して瑞昌を攻略した。丸山支隊は徳安北方に向かう攻撃前進を準備。

丸山支隊は南東進し、二十九日夕に岷山、九月三日午後には馬廻嶺に進出……

このように防衛庁の公刊戦史に記されているが、岩田氏は歩兵第三十五連隊の二年兵として作戦前後の中支（揚子江南岸地域）で戦闘・警備の任についていた。この度の証言は、中支蘇州付近の戦務を毎日記録した日誌に基づいて記されている。これにより、外地での日々の勤務、生活、感想等が赤裸々に語られているが、その一部を記載したものである。

遥かなり中国戦線

山梨県 長坂義行

大正二年四月三日、山梨県北巨摩郡更科村上の山九三番地に生まれ、昭和十六年四月、九三三番のころへ分家しました。昭和十四年十月、葦崎町に合併、同三十一年十月葦崎市になり、現住所は葦崎町上の山九三二です。祖父母、父母、叔父二人、兄二人の大家族です。中堅の農家ですが雑貨商等も兼営しておりました。

葦崎青年学校専修学校を卒業後農業の他、自営業も兼業していました。昭和八年に入営、帰郷後在郷軍人として奉仕し、簡閲点呼が七回、教育召集が二回ありました。また昭和十四年・四泊五日、昭和十五年四月・七泊八日で甲府第六十三部隊に短期入隊しました。

昭和十六年一月に東京世田谷の東部自動車隊に召集になりましたが、その時二十七歳でした。中隊長は伊